

7月19日 (日) サムエル記上 26章	「サウルはダビデに言った。『わが子ダビデよ。おまえに祝福があるように。お前は活躍し、また、必ず成功する』ダビデは自分の道を行き、サウルは自分の場所に戻って行った」(25節)。サウルの半生は部下ダビデへの嫉妬に囚われた、平安なき日々だったが、この夜、ダビデを祝福できてよかった。このあとサウルはダビデと再会することなく戦死するのだから。
20日 (月) サムエル記上 27章	「ダビデは心に思った。『このままではいつかサウルの手にかかるにちがいない。ペリシテの地に逃れるほかはない』」(1節)。勇気をもってサウルと対話し平和に別れたダビデの恐れがぶり返す。何度も命を狙われてきたのだから、さもありなん。だが、その地で生き延びるためペリシテの王の臣下となり、王の信用を得るため殺戮と略奪を繰り返すことになる。
21日 (火) サムエル記上 28章	「その女はサウルに近づき、サウルがおびえきっているのを見て、言った『...ささやかな食事をあなたに差し上げますから、それを召し上がり、力をつけてお帰りください』」(21-22節)。主の先見者に見捨てられ、おびえて弱り切ったサウルを、異教の行いとされる「口寄せ」で暮らす彼女だけがいたわった。「善きサマリア人」を思い出すのは飛躍し過ぎだろうか。
22日 (水) サムエル記上 29章	「『サウルは千を討ち、ダビデは万を討った』と人々が歌い踊ったあのダビデではないか」(5節)。一方ダビデも、サウルのもとにも帰れず、ペリシテの王のもとからも退けられ、行き場を失った。かつてペリシテ軍に大勝したダビデを讃えたこの歌は、サウルに妬みを、ペリシテの武将たちに警戒心を起こさせたもので、皮肉にも今のダビデの立場をよく表している。

23日 (木) サムエル記上 30章	「兵士は皆、息子、娘のことで悩み、ダビデを石で打ち殺そうと言い出したので、ダビデは苦しんだ。だが、ダビデはその神、主によって力を奮い起こした」(6節)。ペリシテ軍からお払い箱となり、失意と疲れの中帰ってくると、家族が待っているはずの町は略奪で荒れ放題。自軍の兵からも責めを受け、ついに孤立無援。その時、主がダビデに働いてくださった。
24日 (金) サムエル記上 31章	「ギレアドのヤベシュの住民は...彼ら(サウルと息子たち)の骨を拾ってヤベシュのぎよりゆうの木の下に葬り、七日間、断食した」(11－13節)。主はヤベシュの住民を用いて、サウルにも憐れみを示された。かつてサウルの援軍に敵の襲撃から守られた国境の住民たち。サウルが王として陣営の木の下に座り、指揮を下した姿を思い起こしての埋葬だったのだろう。
25日 (土) サムエル記下 1章	「ああ、勇士らは倒れた。戦いの器は失われた」(27節)。伝統的な英訳は「How the mighty have fallen!」英雄たちの死を悼む詩歌でよく引用されている。サウルに追われる流浪生活の終曲となったこの歌は、サウルの正統な王位継承者として立つための闘いの前奏曲でもあった。「主に選ばれた王」ダビデ。人々の野心や欲望が交錯する中をどう生きるのか。
26日 (日) サムエル記下 2章	「アブネルはヨアブに呼びかけて言った。『いつまで剣の餌食とし合うのか。悲惨な結末になることを知らぬわけではあるまい』」(26節)。「将軍」と呼ばれる人たちがいる。彼らは常に「戦いで勝利すること」が求められたが、同時に「剣による戦いの空しさと悲惨な結末」を知っていた人たちであった。世界の「将軍」たちに、今日、戦いを止める勇気が与えられるように。